



Title	研究会の感想
Author(s)	永山, 亜樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 33-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68179">https://hdl.handle.net/11094/68179</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 研究会の感想

永山 亜樹

今回は、講演会の後に桂ノ口さんから頂いたご質問にお答えしながら、自分をさらに分析しようと思います。

——「この人ならば大丈夫な気がする」「この人は本気で向き合ってくれている」と感じる時は、どのような時ですか。

このように相手のことを見つめ始めたのは、少し遅いかもしれません。なぜかというと、少なくとも、高校に入学をするまでは、人と深い関わりを持ちたい、誰かと一緒に行動したいという気持ちよりも、1人で活動したいと思っていたことが強くあったからだと思います。そしてもう1つ、白か黒、0か100で人を見てきた自分も思い出します。合わないこと(何組の男子がかっこいい、この服かわいいなど話題に興味を持てない、クラスの催しに熱心でついていけない、声が高くてしんどい、服装がにぎやかで目が疲れる)を自撃してしまうだけで、この人とは関わないと決めてしまっていました。人と関わる前に決めてしまうことがあります、人と話す前から、人の交わりを絶ってしまう自分がいたので、この人なら大丈夫など、深く人を見つめたことがありませんでした。

そのように過ごしてきたので、「この人ならば大丈夫な気がする」「この人は本気で向き合ってくれている」と強く感じ始めた(わかり始めた)のは、大学に入学して、人もまあ良いかなあと思えるようになったり、0と100の間を数字を許容でき始めた頃と重なると思います。なぜ、そのようなことができるようになったかというと、心地よくもあり、自分を苦しめさえする0・100思考に永浜先生をはじめ、周りの人からアドバイスされる「適当」「力を抜く」という加減を学び始めたからだと思います。長い時間かけて、0・100の

間に90、50、60と数字がはいるようになっていきました。自分の0・100思考に幅ができると、人に対しても、良い・悪いではなく、「こういうところもあるけど、こんなところもあるんだ！」と1つの見方にとらわれないことが増えていきました。こういう間（の数字）を知ることで、人には幅があり、自分にも幅があるということが分かっていきました。

自分の大事にしていることと相手が大事にしていることが交われば、その人との関係が続くと思っています。相手が何を大事にしているかが分かるには、たくさんの時間がかかると思います。直感で大丈夫だと思うのは自分でも理由がよく分かりません。でも、この人とまた話をしてみたいなと思ったりすることや、その人の持っている柔らかさや強さ、不器用さに惹かれたりして、その人へ向かって矢印が生まれるのかもしれません。

「本気で向き合ってくれている」と感じる時は、かけ離れた未来ではなく、かと言って現状に浸る訳でもなく、一歩先のことを丁寧に話ができる時かなと思っています。

——「写真を見てかくときは、目を目と思わずここは黒だなどいうふうにかいでいる」とおっしゃっていたと思います。それは、写真の場合は「形」ではなく、「色」で捉えているということでどうか。

写真を見て描くときは「形」も「色」も見てています。単に見ている時は、写真をボーっと眺める時のように、木があつて、車が走っていて、遠くにビルがある「名詞」が浮かぶのですが、描いているときは、それが全くなくなってしまいます。ビルという認識がなくなり、縦の線2つ、横の線1つ、中に四角がいっぱいと言葉になる前に形に置き換えられています。

——普段あじゅさんは世界のどんなものを見て過ごされていると思いますか。

みなさんと見えているものは同じだと思いますが、規則正しいものや、一定に動くものを見ていることが多いかもしれません。例えば、信号待ちをしている時に車のタイヤをながめたり、ビルの窓の数を数えたりしています。電車がホームに入ってくる時に、窓が規則正しく並んでやってくるのを眺めたりもしています。

人も含めてそうですが、不規則に動きが変わるものや、曲線の形などに違和感を感じることがあり、よく見れていないことがあるとおもいます。でも、今回の旅(58日かけて東京から堺まで歩きました)でそのようなことがなくなっていくかもしれないと思い始めています。

他には、テレビドラマなどを観ていると、背景に気を取られて、続していくストーリーについていけなくなり、なぜ犯人が逮捕されたのか分からなくなっていることがあります。似ている感覚としては、人の話を聞く時も、視界に気を取られて、話を聞けていない時があります。

### ——イラストと絵の違いについて、教えていただけませんか。

芸術でいうイラストと絵の違いなどはわかっていないませんが、今回発表したスライドで使用したものを「イラスト」、そうではなく、普段時間をかけて描いているものを「絵」として、描いていきたいと思います。

イラストは思い出しながら描いています。思い出しながら描く時には、次々シーンが見えてくるので、描くスピードが速くないと、何ヶ月もかかってしまうと思います。沖縄の報告会では100枚、今回は70枚のイラストを描きました。どれも中心となるのは、人だったので、ここで人や人の動きを描きはじめました。普段も人に焦点を当てて絵を描いたことがないので、これを見た人は、とてもギャップを感じるのではないかと思います。

このイラストは、すぐに言葉が出てこない（文章化するのに非常

に時間がかかる）ので、言葉よりも先に出てくる映像（シーン）を描き留めて、文章にするための資料のような役割です。

絵は写真を見ながら描いています。丁寧に時間をかけながら描いています。形や色を詳しく見ながら描いています。また、描きたいと思う、ビルや乗り物を描いています。

——ポスターのデザインの時などは、どこをとっかかりにして、どのように（どこにどんなものを置くかや、どこに文字を配置するかなど、どんなふうに考えて作っていらっしゃるのか）作業を進めているのですか。

ポスター制作のときは、主にタイトルや講演内容からイメージをつくります。今回（※文末に掲載）は、哲学対話と当事者研究ということで、主に当事者研究からイメージしたものでつくりました。自己を分析するという意味で、自己を拡大するイメージから、虫眼鏡を連想させ、「当」という字を虫眼鏡で覗いているようにするといいかな。また、自分を研究するということは、自分を知っているようで知らないことなのかなと思い始め、そのままを写し取る写真を載せるよりも、自分のようだけど、自分でないような似顔絵が、イメージに合うと思いました。言葉から形やものを想像しています。このように、イメージが湧いてから、パソコンに向かいします。配置などは、きれいな形におさまるようにレイアウトします。時々、形（レイアウト）ばかりを意識しすぎて、日付や時間帯が小さくなってしまうこともあります。なので、形も大事だけれど、情報がすぐに目にに入るようなどのように配置するかなど、まだ試行錯誤しています。

——なぜ言葉にしたくなるのでしょうか。

私は、それこそ大学に入ってからも、言葉に興味をもったことがありません。なので、今でも、ことわざやこの年齢で知っているは

ずの言葉にも？？？となってしまいます。

YESとNOと嬉しい、悲しい、怒っている、楽しい、と数字があれば十分だと幼い時から思っていました。

それに大きな変化をもたらしたのは、これも大学に入ってからです。自分がどうしたいのか、何を伝えたいのか、気持ちを相手に伝えたいと思えば思うほど、悲しいや嬉しいという言葉が、なんてアバウトで自分の心情に寄り添っていないのだろうと思い始めました。私の場合は、きちんと伝えたいと思った人がいたこと、また、自分の中で感じていること、思っていることを、ただ誰かが言っている言葉をなぞるのではなくて、自分の言葉で正確に表したいと思ったことが、言葉にしたくなった動機だと思います。

——絵という言葉で表現をしたとき、返事を感じますか。

自分から自分への返事は感じません。それは、そのときに描きたいものを描いているだけからかもしれません。ただ、自分の絵を見返すと、その時にどのような心情だったか、どのような出来事があったか思い出します。以前の絵と、現在の絵を見た時に、思い出話を頭の中ですることはあります。

自分の絵を見たときは、メッセージを感じるのではなく、その時の心情を思い出します。

何よりも言葉でもやもや説明するよりも、絵で描いた方が、そのときの気持ちを乗せられる、伝えられる1番の自己表現、相手への伝達方法と思っています。

また、自分ではない人が描いた絵には、返事ではないけれども、何を思ってこの絵を描いたのか、なぜその題材なのか、どうしてそんなに筆使いが豪快なのか、どうしてその場所に明るい色を置いたのかなど、その人や背景にあるものが何なのか知りたくなります。

——他の人から、自分自身の絵への返事を感じたことがありますか。

今は見たものや好きな絵を描いていますが、しんどい時期に電車がまっぷたつに折れて、崖から落ちそうになり、はたまた隕石が向かってくるという絵をスケッチブックに描いたことがあります。

それは、永浜先生、永浜先生のお母さんとやりとりしていた交換日記で描きました。そのときは苦しさや、しんどさ、悲しさ、辛さを声に出すことが出来ず、言葉にすることもできませんでした。その絵に対して、言葉で返事はなかったと思います。その当時はどうして、返事がなくて、話がそれた内容なんだろうと思っていました。今、この話を永浜先生先生と zwar いますが、絵や言葉では返事をしていないけれども、あなたの絵から受け取ったことを、態度や接し方であなたに表現していたんじゃないのかな。と話してくれました。今ようやく気付きました。返事を感じたのはこの1度だと思います。

これらの質問に対する、自分の考えていることがまたみなさんの何か役に立てれば嬉しいです。感想に代えて。

(ながやまあじゅ)

# 当事者 研究 と 哲学 対話

第40回  
臨床哲学  
研究会

2017.3.21

TUE

13:00

17:30

at

大阪大学豊中キャンパス  
基礎工学部 1 棟  
オレンジショップ



永山亞樹（1st登壇者）

「共歩と私らしさ」

（発達障がい当事者、元素大・日本財团

「真才発掘プロジェクトROCKET」特別スカラーカー）

松前香里（2nd登壇者）

「日常の中の治療的対話をめざして」

（NPO法人社のかけはし障がい福祉サービス事業所大地・

相談支援事業所空（そら）、相談支援専門員）



基調講演

石原孝一（元大阪大学准教授）  
「当事者研究とオープンダイアローグ」



福原美苗（3rd登壇者）

「哲学対話における現象学的アプローチ」

（神戸大学准教授）

illustrated by Aju